

京阪神聯合保育会雑誌 (1)

——創刊当初の内容——

水野浩志

まえがき

京阪神聯合保育会雑誌は戦前のわが国の保育界の動きを知り、保育史を研究する者にとってはまことに貴重な文献であるが、惜しいことに資料が散逸してしまい、創刊当初からのものを完全にそろえることはまことに容易ではない。私も今から二十数年前、神戸の頌栄短期大学在職中に、二年間、大阪の愛珠幼稚園に通って、黒表紙の部厚く製本された初期の頃の四冊の京阪神保育会雑誌に目を通し、主要な記事をノートに書き写したりしたものが、それが後に、『日本幼児保育史』（日本保育学会編）を分担執筆するときに大変役に立ったものである。その後明星大学の岡田正章氏が、大阪教育大学附属幼稚園に保管されていた初期の同雑誌の製本された四冊を発見され、マイクロフィルムに収録してこら

れたことを伺った。

このたび大阪府幼稚園開設百年を記念して同雑誌のことについての執筆依頼を受けたが、私の古ぼけたノートのメモを頼りに同誌の解説を試みることはまことに心苦しいので、岡田氏からマイクロフィルムをみせてもらいながら、同誌の創刊当初から大正初期頃までの内容紹介や、同誌の保育史的意義などについて述べてみようと思う。それにつけても早い機会に同誌が完全な形で復刻され、全巻を通しての解説が試みられることを心から望むものであり、私がこれから述べるものはその序論にすぎない。

① 同誌の保育史的意義

京阪神保育会雑誌は、三市聯合保育会が結成された明治三十年十一月の翌年、すなわち同三十一年七月に創刊されたものであ

る。それ以来明治・大正期を通じて年二回ずつ発行され、昭和三年以降は関西聯合保育会雑誌として、年一回ずつ発行された。同誌は関東のフレイベル会の『幼児の教育』（婦人と子ども）とならんで、戦前における二大保育会雑誌としてわが国保育界に多大の貢献をしたのである。フレイベル会は明治二十九年に創設され、明治三十四年から『婦人と子ども』（後に幼児の教育と改称）を月刊誌として発行しつづけた。この『婦人と子ども』は東京女子高等師範学校附属幼稚園関係者を中心とした、幼稚園教育の啓蒙指導書的人格が強いものであった。これにくらべると京阪神保育会雑誌は、三市聯合保育会大会報告を中心としながら、さらに三市の保育会がそれ／＼有意義な論説（各保育会で実施した講演会の内容）や協議、研究課題や記事・報告を持ちより、編集されたもので、現場の保育問題や悩み、あるいは研究協議の過程などを詳細に掲載すると共に、所属幼稚園の各種実態調査や新しい試みなどを紹介しており、各時代の現場保育の実情を知るにはまことに好都合のものである。

京阪神地区の幼稚園は、まことに積極的でよいと思われることはすぐに取り上げ実践し、その成果を三市聯合保育会で発表し、協議する機会に恵まれたのであり、同地区の幼稚園教育は、つねに全国の範として戦前の保育界を指導していったといっても決して

て過言ではなかった。戦前の幼稚園教育界の理論を指導した中村五六も、倉橋惣三も、つねにこの関西保育会の実践から教えられ、自己の理論の裏付けを関西保育会の実践によって得たのであった。このような三市聯合保育会の機関誌としての同雑誌の内容の変遷は、とりもなおさず、わが国幼稚園教育の歩みを如実に物語るものである。

先人たちが政府や世人の無理解と無援助の中で、如何に幼児教育の情熱に燃え、多くの苦難と闘いつつ、団結してわが国の幼稚園教育の発展のために尽力したか、根強い形式主義的恩物中心主義の保育を克服して、新しい保育法を生み出すためにどのような研究討議を重ねてきたか、文字や数の教育に対してどのような批判検討を積み重ねてきたか、保育者養成に対してどのような建議や方策を講じてきたのか、単なる空想的理想論ではなく、現場においてどのような着実な実践努力が行なわれてきたのか、各時代毎のこれら苦難克服の姿を京阪神保育会雑誌は如実に示してくる。その意味において同誌の保育史的意義はまことに大きく、わが国幼稚園教育発達史上、欠くことのできない貴重な文献であるということができようであろう。

② 同誌の規約および名称等の変遷

雑誌発行に関する規約が定められたのは、明治三十一年四月に開催された第二回三市聯合保育会の席上で、次の如くであった。

○雑誌発行ニ関スル決議

一、名称

京阪保育会雑誌ト称ス

一、発行期

毎年六月十二月ニ発行シ、一般会員ニ頒ツ

一、発行所及編輯人

大阪市保育会ニ於テ担当スルコト

一、編輯方法

① 各市保育会ニ於テ適宜雑誌ノ材料ヲ編纂シ、発行期ノ前

月中ニ発行所ヘ送付スルコト

② 発行所ニハ更ニ三名ノ委員ヲ置キ全部ニ係ル編輯ヲナス

コト

③ 記載ノ事項ハ凡ソ論説記事彙報等トス

④ 各市保育会ニ於テ需要ス可キ雑誌部数ハ聯合保育会開会

ノ都度之ヲ定ム

一、経費 雑誌編輯ニ係ル費用ハ其需要数ニ応ジ経費出納明細

書ニ依リ各市保育会ヨリ発行ノ翌月中ニ発行所ニ送付スル

コト

一、広告料 広告料ハ一行一回拾銭、一頁弍円トシ、会員ハ其

半額トス

以上。

その後明治三十五年四月、神戸保母会が宗教上の理由から三市聯合保育会から脱会することとなり、一時、京阪聯合保育会と名称を変更したときに雑誌も京阪聯合保育会雑誌と改称された。

(明治三十五年七月に発行された第八号のみ)しかし神戸保母会の頌栄幼稚園(イー・エル・ハウ園長)を除いた神戸市立の各幼稚園は、あらたに神戸市保育会を結成し、京阪聯合保育会に再加盟したので、明治三十五年十二月には、あたらしい京阪神聯合保育会の規約が成立した。この規約によると、

第九条 本会ノ目的ヲ達センガ為メニ毎年六月十二月ノ二回雑誌ヲ発刊ス、之ヲ京阪神聯合保育会雑誌ト称ス

第十条 雑誌編輯印刷等ハ当分大阪市保育会之ヲ担当シ実費ヲ

以テ京阪両市ノ会員ニ需要ノ部数ヲ分配ス

となつてゐる。

このように雑誌発行に関する規約も聯合保育会規約中に成文化され、大阪市保育会が編集・印刷・発行の全責任を負うこととなり、京都および神戸の両市保育会は必要に応じて配布を受けることとなつた。

しかしその後明治四十三年の第十七回三市聯合保育会において、雑誌発行に関する規約が改正され、再び創刊時の雑誌発行に関する決議の原則に戻つた。すなわち、

雑誌発行に關する規約（明治四十三年五月改正）

(一) 名称、京阪神聯合保育会雑誌と称す。

(二) 発行期、毎年一月・七月に発行し、一般会員にわかつ。

(三) 発行所及編集者、大阪市保育会において担当する。

(四) 編集方法

(イ) 各市保育会で適宜雑誌の材料を編集し、発行期の前月中旬に発行所に送付すること。

(ロ) 発行所には更に3名の委員を置き、全部に係る編集をなすこと。

(ハ) 記載事項はおよそ論説・記事・彙報等とす。

(ニ) 各市保育会において需要すべき部数は聯合保育会開会の都度之を定む。

(以下同様省略)

昭和三年、吉備保育会および名古屋保育会がその傘下に入り、

関西聯合保育会が成立してからは、同誌も関西聯合保育会雑誌と名称を変更し、発行も年一回ということになった。

大阪市保育会の会長は主として大阪府師範学校附属幼稚園々長（後に女子師範附属幼稚園）がその職に當っていたので、三市聯合保育会雑誌の編集は、大体同校の教諭又は附属幼稚園の保姆で大阪市保育会の役員（理事）だった者がその責任者となった。氏

原帳も明治三十五年大阪府女子師範学校に転動して以来、退職するまで六年間（十二回）同雑誌の編集責任者として活躍している。

③ 創刊号の内容の概要

明治三十一年七月に発行された「京神阪保育会雑誌」の創刊号についてはその内容を紹介しておこう。その目次は次の如くであった。

◎ 祝辞

○、神戸保母会祝辞

○、平沼大阪商業学校長祝辞

○、是石大阪府師範学校長祝辞

○、福島大阪府師範学校教諭祝辞

◎ 論説

○、三市聯合保育会ニ於テノ演説

○、全

○、幼稚園ノ教師ニ就テ

○、幼稚園ニ就テ言ヒタキママ

○、幼児ノ体育

中村 五六君

是石辰二郎君

ブール嬢

M W君

小林 山郷君

○、家庭ノ感化ト保育事業ト

岩谷英太郎君

◎記事

○、三市聯合保育会創立

○、第一回三市聯合保育会（京都ニ於テ開会）

○、第二回 全 （大阪ニ於テ開会）

○、会員

◎彙報

○、京都市保育会沿革概要

○、大阪市保育会

○、全寄附金人名

○、雑誌編輯ニ関スル委員

○、神戸保母会ノ成立

○、三市幼稚園ノ統計

○、幼稚園作業ト他学校教科トノ關係一覽表

○、大阪市幼稚園ト旧府立模範幼稚園トニ就テ

○、大阪府師範学校附属幼稚園概況

○、東区保育法研究会

○、西区保育会

○、南区各幼稚園一覽表

○、北区幼稚園ノ概況

○、保母助手検定問題

◎詞藻

○、和歌

◎雑録

○、お婆さんと鶴との童話

○、紐置

○、幼稚園

○、幼児発育研究組合報告

○、幼稚園制度ノ調査委員

◎附録

○、大阪市幼稚園一覽表

以上のような目次から大体的内容はお分りいただけると思うが、多少の解説をすれば、論説の中村五六は東京女子師範学校教授兼同校附属幼稚園主事であつて、これは第二回三市聯合保育会での講演内容であつた。その内容については後述したい。是石辰二郎は大阪府師範学校長で、同じく第二回大会での講演内容を記録したものである。そのほか、プール嬢は関西女子高等女学校（後の関西女学院）教員、小林山郷は医者で、大阪市西区保育会で行つた講演の要旨を掲載したものだつた。岩谷英太郎は大阪市立高等女学校の教諭という肩書きだつた。

〔記事〕はまず三市聯合保育会創立の経過報告にはじまり、第一回及び第二回の同大会記録が詳細に掲載されている。とりわけ各市提出の協議題目をめぐって活発な意見のやりとりが述べられており、当時すでに恩物の取捨選択の可否だとか、自然物利用や園外保育について等の意見が出されていることは注目に値する。

また同聯合保育会創設時の会員名および所属の一覧表が掲載されており、当時京阪神地区を活躍した保育者を知る上で便利である。

〔彙報〕には三市各地区の保育会創設の事情や当時の活動状況が紹介されているほか京都・市保育会提出による市橋虎之助作成の「幼稚園作業ト他学校教科トノ関係一覽表」や「大阪市幼稚園ト旧府立模範幼稚園トニ就テ」と題する氏原銀の記事等がのっており、ともに興味深いがとくに後者の記事は大阪における幼稚園発展の経路を詳細に物語っている。（日本幼児保育史第一巻二二九頁―二二三頁参照）

〔雑録〕の「幼稚園」は「日本現時教育」誌に掲載されたものの再録であり、「幼児発育組合報告」と「幼稚園制度の調査委員」は「フレーザー会」の報告記事で、ともに「教育壇」に発表されたものを再録したものである。このように他の教育雑誌や新聞記事の中から保育に関する重要記事を、さらには外国の保育事情紹

介などを雑録でつねにとりあげている。

〔付録〕の大阪市幼稚園一覽表は明治三十一年四月現在の大阪全市の公立幼稚園の現況を一覧にしたもので貴重な資料である。

（日本幼児保育史第一巻二二二―二二四頁参照）

創刊号は総頁数八七頁、付表三枚で表紙には折紙・積木・結び・織紙・豆細工等恩物遊びの材料がえがかれていた。また編集責任者は古市さだ（大阪府師範学校附属幼稚園保姆）となつてい

る。以上が創刊号の内容の概要であるが、この創刊号の編集形態はその後一貫してほとんど変わらなかった。すなわち、①論説 ②三市聯合保育会記事 ③三市各保育会の彙報 ④雑録 という形態で、時に祝辞やら詔勅やら口絵が前にのる程度の相異があつたにすぎない。

京阪神保育会雑誌の第二号以下の内容の変遷についてその詳細な解説をすることはできないが、時代の流れに沿った内容変遷や、理論的指導者の論説要旨およびその活躍、同誌の特色ある記事など今少し述べてみようと思うが紙数がつきたので次回に回すことにする。

（都立立川短期大学）